

平成 19 年度

病害虫発生予報第 3 号

平成 19 年 6 月 27 日

三重県病害虫防除所

515-2316 三重県松阪市嬉野川北町 530

TEL 0598-42-6365 Fax 0598-42-7568

ホームページ <http://www.mate.pref.mie.jp/bojyosyo>

目次

	ページ
1. 向こう 1 か月の予報と対策	1
2. 作物別の状況	2
3. 発生時期・発生量（平年比）の予察根拠	8
4. 予察項目の見方	14
5. 今月のトピックス	15
6. 気象のデータ	16
7. おしらせ	18

1. 向こう 1 か月の予報と対策

1) 普通作物

イネでは、いもち病の発生時期は葉いもちでやや遅、穂いもちで平年並、また発生量は葉いもちでやや少、穂いもちで平年並と予想されます。紋枯病の発生時期は平年並、発生量はやや多と予想されます。イネクロカメムシはやや多、セジロウンカ、ツマグロヨコバイの発生量はともに平年並、白葉枯病、斑点米カメムシ類の発生量はやや少と予想されます。

いもち病については、発生に注意して適切な防除を心がけてください。やや多と予想される紋枯病、イネクロカメムシについては特に注意が必要です。

2) 果樹

カンキツでは、そうか病の発生量は少、かいよう病の発生量は温州みかんでは少、中晩柑類では平年並、黒点病、ミカンハダニの発生量は平年並と予想されます。チャノキイロアザミウマの発生量はやや少と予想されま

す。

ナシでは、黒星病、ハダニ類の発生量はやや少と予想されます。

ブドウでは、べと病の発生量はやや少と予想されますが、今後の降雨に

注意して予防防除を実施してください。

果樹カメムシ類の発生量は少と予想されます。

3) 茶

炭疽病の発生量はやや少と予想されます。チャノホソガの発生量はやや多と予想されますので、発生に注意してください。カンザワハダニ、チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマ、クワシロカイガラムシ、チャノコカクモンハマキの発生量は平年並と予想されます。クワシロカイガラムシ第 2 世代幼虫孵化最盛期と防除適期に関する技術情報を 7 月中旬に提供する予定です。

4) 野菜

イチゴでは、うどんこ病、ハダニ類の発生量はやや多と予想されますので、予防防除や密度の低いうちの防除を心がけてください。炭疽病の発生量は平年並と予想されます。

ネギでは、ネギコガの発生量はやや少と予想されます。

2. 作物別の状況

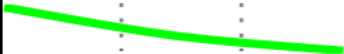



作物名	病虫害名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
						6月		7月		
						下旬	下旬	中旬	下旬	
イネ	葉いもち	やや遅	やや少	小	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 葉いもちの発生がみられたら粒剤等により早急に防除します。 2) 6月22日に病虫害防除技術情報(第2号)を公表しました。
	穂いもち	平年並	平年並	中	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 出穂時、上位葉で葉いもちが多く見られる時は、降雨により穂いもちへ移行することが懸念されます。 2) 穂いもちが発生したら減収に結びつきますので、穂孕み期の予防散布に重点をおきます。
	紋枯病	平年並	やや多	中	高					<ol style="list-style-type: none"> 1) 梅雨明け後、気温の上昇とともに感染適温になるので注意が必要です。 2) 例年発生が多い圃場では特に注意します。 3) 上位葉への病斑進展阻止に重点をおき防除します。 4) 「みえのえみ」はやや弱い品種です。
	白葉枯病	—	やや少	小	低					<ol style="list-style-type: none"> 1) 常発地では、冠水、強風雨のあとで急に発生することがあります。 2) 「みえのゆめ」は弱い品種なので特に注意してください。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項		
			平年比	平年比		程度	平年比	6月			7月	
								下旬	中旬		下旬	中旬
イネ	斑点米カメムシ類	—	やや少	小	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 出穂 10 日前までに畦畔や周辺を除草します。 2) 出穂の早い水田を集中的に加害するので、早生品種の栽培圃場では特に注意します。 3) 地域一斉防除によって防除効果が高まります。 4) 圃場周辺のイネ科植物上で小型種（アカスジカスミカメ等）が高密度に増殖した後、水田に侵入して、甚だしい減収をもたらすことがあります。 		
	イネクロカメムシ	—	やや多	中	高					<ol style="list-style-type: none"> 1) この時期は、イネの葉先が白く縮れる症状が現れます。 2) 収穫時まで被害が徐々に増加するので、現在発生が見られる圃場では早急に防除が必要です。 3) 日中は株元に潜んでいるので、夕方や曇天の日に薬剤散布を行うと効果的です。 4) 常発地では特に注意が必要になります。 		
	ツマグロヨコバイ	—	平年並	中	低					<ol style="list-style-type: none"> 1) 当面、防除が必要な密度には達しないと思われます。 		
	セジロウンカ	—	平年並	小	低					<ol style="list-style-type: none"> 1) 多飛来が認められれば病害虫防除技術情報等で発表しますので、その時は圃場での発生状況に注意してください。 		
カンキツ	そうか病	—	少	小	低					<ol style="list-style-type: none"> 1) 常発園、幼木園、高接ぎ更新園の温州ミカンでは、特に発生に注意します。 2) 果実への感染は梅雨末期頃までといわれています。 		

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項		
			平年比	平年比		程度	平年比	6月			7月	
								下旬	中旬		下旬	中旬
カンキツ	黒点病	—	平年並	小	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 枯枝は重要な伝染源です。園内、樹内の枯枝除去を行い、病原菌密度を下げてください。 2) 薬剤散布は前回の散布後に積算降水量が200~300mmに達した時を目安に実施します。 		
	かいよう病	—	温州 少 中晩柑 平年並	小 小	低 普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 7月が果実での発病最盛期になるので、現在発病している園では早急に防除します。 2) 伝染源となる発病枝葉、果実は、見つけ次第剪除し処分します。 3) 高接樹や幼木ではミカンハモグリガの被害部に発病しやすいので、ミカンハモグリガの防除を実施します。 		
	ミカンハダニ	—	平年並	中	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 1葉当たりの雌成虫発生数が0.5~1.0頭程度を目安に防除します。 2) ほとんどは葉裏に寄生しているので、薬剤は葉裏にもかかるように散布します。 3) 世代交代が早く薬剤に対する抵抗性を獲得しやすいため、マシン油乳剤を除いては同一系統の薬剤の連用は避けま 		
	チャノキイロアザミウマ	—	やや少	小	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 発生の多い園や被害果の見られる園では、寄生果率10%を目安に防除します。 2) 7月になり果実肥大が進むと果頂部で加害します。 3) カンキツ園周辺のイヌマキ・サンゴジュ・チャ等が発生源となります。 		
ナシ	黒星病	—	やや少	小	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 発病が確認される園地では、基幹防除を実施し、追加防除も計画してください。 2) 発病果及び発病葉は除去して、園外に持ち出し処分します。 3) 薬剤散布を実施するときは薬剤をていねいに散布し、同一系統薬剤の連用を避けま 		

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項		
			平年比	平年比		程度	平年比	6月			7月	
								下旬	上旬		中旬	下旬
ナシ	ハダニ類	—	やや少	中	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 一般には7～8月に密度が高くなります。 2) この時期に高密度になるとナシの発育枝に被害を与えて、果実肥大に大きな影響を与えます。 3) 1葉当たり寄生虫数が1～2頭で防除を実施します。 4) 抵抗性を獲得しやすいので、同じ薬剤の連用は避けます。 		
ブドウ	べと病	—	やや少	小	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 降雨が連続すると、病徴が急速に進展するので、葉裏に病斑を認めたら直ちに薬剤を散布します。 2) 降水量は本病の発生と深い関係があります。降雨の合間に防除を計画してください。 3) 被害葉及び被害落葉は感染源となるので園外に持ち出して処分します。 4) 薬剤散布にあたっては同一系統薬剤の連用を避けます。 		
果樹共通	カメムシ類	—	少	小	低					<ol style="list-style-type: none"> 1) 局所的に密度が高まる場合があります。まとまった飛来を確認したら、防除を実施してください。 2) 発生が見られない園では、防除の必要はありません。 		
チャ	炭疽病	—	やや少	小	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 病原菌は開葉間もない新葉だけにしか侵入できないので、新芽の生育期が防除適期です。 2) 二番茶残葉に病斑が見られる園では注意が必要です。 		
	カンザワハダニ	—	平年並	中	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 地域や茶園によって発生の差が大きく異なります。 2) 多発すると防除が困難なので、発生初期の防除が重要です。 3) 世代交代が早く、薬剤に対する抵抗性を獲得しやすいため、同一系統の薬剤の連用を避けます。 		

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項		
			平年比	平年比		程度	平年比	6月			7月	
								下旬	中旬		下旬	中旬
チャ	チャノホソガ	—	やや多	小	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 成虫発生期が三番茶芽の開葉期にあたる茶園では、三番茶芽に被害が発生する恐れがあります。 2) 幼虫の孵化直後の葉裏潜行期が防除適期です。脱皮阻害剤を使用する場合は、卵期が防除適期で少し早めです。 3) 一番茶摘採後、深刈り更新等を行い、二番茶を摘採しなかった園では巻葉や次世代の発生に注意してください。 		
	チャノミドリヒメヨコバイ	—	平年並	小	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 三番茶の生育期は発生しやすい時期なので2葉期までに防除が必要です。 		
	チャノキイロアザミウマ	—	平年並	中	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 三番茶期は発生および被害が多いので、2葉期までに防除が必要です。 		
	クワシロカイガラムシ	—	平年並	小	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 発生が見られるにもかかわらず、第1世代防除が実施できなかった園では、必ず第2世代幼虫発生期の防除を実施してください。 2) 多発園では深刈り更新と防除を組み合わせると効果的です。 3) 防除適期は、孵化最盛期から5~7日後です。 4) 第2世代幼虫孵化最盛期と防除適期に関する技術情報を7月中旬に提供する予定です。 		
	チャノコカクモンハマキ	—	平年並	小	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 7月上旬~中旬の若齢幼虫期に防除します。 2) 二番茶後に刈り落としを行うところでは防除の必要がなくなります。 3) 一番茶摘採後に深刈り更新等を行い二番茶摘採しなかった茶園では、発生に注意してください。 		

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
						6月		7月		
						平年比	平年比	程度	平年比	
イチゴ	うどんこ病	—	やや多	大	普通	発病密度 				<ol style="list-style-type: none"> 今後高温になるに従い、一時的に見られなくなります。 薬剤散布は、予防に重点をおきますが、発病を認めたときは、集中的に散布して十分に防除してください。 葉裏から発生しやすいので、薬液が葉裏までかかるよう丁寧に散布します。
	炭疽病	—	平年並	中	普通	発病密度 				<ol style="list-style-type: none"> 灌水は、水滴が極力茎葉に当たらないように行います（やさしく手灌水、チューブ灌水）。 これからの高温期にかけて定期的な防除と降雨前、葉かき後の防除を徹底して行います。 薬剤散布は、株元まで十分かかるようにし、畝やベンチの両側からも散布します。
	ハダニ類	—	やや多	中	高	雌ダニ密度 				<ol style="list-style-type: none"> 寄生を確認したら、密度が低いうちに防除するようにします。 抵抗性が発達しやすいので、同一薬剤や同一系統薬剤の連用は避けてください。 残渣からすぐにエサを求めて移動するので、葉かき後の残渣は圃場外でビニール等で密封するなど確実に処分してください。
ネギ	ネギコガ	—	やや少	少	普通	成虫密度 				<ol style="list-style-type: none"> 幼虫が葉の内部に潜るので、潜入防止のため発生の初期から防除しましょう。

3. 発生時期・発生量（平年比）の予察根拠

作物名	病虫害名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	葉いもち	やや遅	やや少	<p>要因</p> <p>1) 巡回調査圃場（6月第3週）では、本田での発生は未確認（発生時期+・発生量-）</p> <p>2) 1か月予報（6月22日）によると、平年と同様に曇りや雨の日が多い予想（±）</p> <p>3) プラストムによる感染好適条件が6月18日頃から県内各地で散見（±）</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は無～やや少（概してやや少）（-）</p> <p>考察：特に多発要因はないので、発生時期はやや遅、発生量は現状のままやや少と考えます。</p>
	穂いもち	平年並	平年並	<p>要因</p> <p>1) イネの生育は平年並のため、出穂期も平年並と予想（発生時期±）</p> <p>2) 1か月予報（6月22日）によると、平年と同様に曇りや雨の日が多い予想（±）</p> <p>3) 葉いもちはやや少の予想（-）</p> <p>考察：イネの生育状況を重視して発生時期は平年並、また気象要因を重視して発生量は平年並と考えます。</p>
	紋枯病	平年並	やや多	<p>要因</p> <p>1) イネの生育は平年並（発生時期±）</p> <p>2) 1か月予報（6月22日）によると、気温は低い予想（+）</p> <p>3) 現在イネの茎数はやや多（発生量+）</p> <p>4) 去年は平均発病株率は16.4%（平年14.1%）でやや多のため、越冬菌核量もやや多と予想（+）</p> <p>考察：発生時期は平年並、また多発要因が揃っているため発生量はやや多と考えます。</p>
	白葉枯病	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) これまでの多量の降雨は6月9日（北勢）、14日（北部）のみ（-）</p> <p>考察：これまでのところ激しい風雨や冠水は少ないので、発生量はやや少と考えます。</p>
	斑点米カメムシ類	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 巡回調査圃場（6月第3週）では、畦畔イネ科雑草すくいとりで発生地点率は19.3%（5年平均27.1%）（-）</p> <p>考察：特に多発要因はないので、発生量はやや少と考えます。</p>

作物名	病虫害名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	イネクロカメムシ	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 巡回調査圃場(6月第3週)では、発生圃場率8.1%(5年平均5.6%) (+)</p> <p>2) 県予察灯(松阪市・6月第4半旬まで)では、誘殺数は水田位置1頭(平年5.0頭)で少、畑位置68頭(平年94頭)でやや少 (-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生は無~多(概してやや多) (+)</p> <p>考察: 圃場での発生状況を重視して、発生量はやや多と考えます。</p>
	ツマグロヨコバイ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 県予察灯(松阪市・6月第4半旬まで)では、誘殺数は0頭(5年平均7頭)で少 (-)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第3週)では、払い落とし虫数(25株当)は成虫で0.33頭(5年平均0.21頭)、幼虫で0.66頭(同0.90頭)と平年並 (±)</p> <p>3) 一般圃場では、発生は少~平年並(概して少) (-)</p> <p>考察: 巡回調査の結果を重視して、発生量は平年並と考えます。</p>
	セジロウンカ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(県内4か所)では、6月16日現在で未飛来(県予察圃平年初飛来7月1日)(±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第3週)では、払い落とし虫数(25株当)は成虫0頭(5年平均0.02頭)で平年並 (±)</p> <p>3) 九州各県では、6月中旬に多飛来に至らない飛来を観測 (-)</p> <p>4) リアルタイムウンカ飛来予測(NAEC等調査)では、6月16日(県南端)25日(県全域)での飛来を予測 (-)</p> <p>考察: 当面は、増殖しても密度が大きく上昇することはないと予想されるので、発生量は平年並と考えます。</p>
カンキツ	そうか病	-	少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月22日発表)によると、気温は低くなく(+)、平年と同様に曇りや雨の日が多い(±)予想 (+)</p> <p>2) 県予察圃(6月中旬)では、発病葉率16.0%(平年60.9%)と少(-)、発病果率54.2%(平年57.6%)と平年並(±) (-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第3週)では、1圃場のみで病斑を確認 (-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は少~平年並(概して少) (-)</p> <p>考察: 急増する要因はないので、予想発生量は少と考えます。</p>
	黒点病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月22日発表)によると、平年と同様に曇りや雨の日が多い予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃(6月中旬)では、果実における発病度5.0(平年5.1)と平年並 (±)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第3週)では、病斑を未確認 (±)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は少~平年並(概して少) (-)</p> <p>考察: 現状の発生は少ですが、気象要因を重視し、今後の増加を勘案して予想発生量は平年並と考えます。</p>

作物名	病虫害名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
カンキツ	かいよう病	-	温州 少 中晩柑 平年並	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月22日発表)によると、気温は低くなく、平年と同様に曇りや雨の日が多い予想 (+)</p> <p>2) 県予察圃(新甘夏、6月中旬)では、発病果率3.3%(平年3.7%)と平年並(±)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第3週)では、温州、中晩柑類とも病斑は未確認(±)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は少~平年並(概して少)(-)</p> <p>考察: 大きな増減の要因はないので、予想発生量は温州みかんで少、中晩柑類で平年並と考えます。</p>
	ミカンハダニ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月22日発表)によると、気温は低くなく(+)、平年と同様に曇りや雨の日が多い(±)予想 (+)</p> <p>2) 県予察圃(6月中旬)では、100 葉当寄生虫数は、無防除区で36.0 頭(平年19.9 頭)とやや多(+)、防除区で17.0 頭(平年10.8 頭)と平年並(±)(±)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、平均寄生葉率は9.8%(平年9.0%)とやや多(+)、1 葉当平均寄生虫数は0.18 頭(平年0.60 頭)と平年並(±)(±)</p> <p>4) 一般圃場での発生量は、少~平年並(概して平年並)(±)</p> <p>考察: 大きな増減の要因はないので、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	チャノキイロアザミウマ	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月22日発表)によると、平年と同様に曇りや雨の日が多い予想(±)</p> <p>2) 県予察圃(6月上旬)では、粘着トラップへの誘殺は1.67 頭(平年1.25)と平年並(±)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第3週)では、被害果は未確認(-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は少~平年並(概してやや少)(-)</p> <p>考察: 大きな増減の要因はないので、予想発生量はやや少と考えます。</p>
ナシ	黒星病	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月22日発表)によると、気温は低くなく(-)、平年と同様に曇りや雨の日が多い(±)予想(±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第3週)では、1 圃場のみで病斑を確認し、平均発病葉率0.4%(平年0.4%)で平年並(±)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は少~平年並(概してやや少)(-)</p> <p>考察: 大きな増減の要因はないので、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	ハダニ類	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月22日発表)によると、気温は低くなく(+)、平年と同様に曇りや雨の日が多い(±)予想(+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第3週)では、平均寄生葉率は0%(平年1.4%)、1 葉当平均寄生虫数は0 頭(平年0.10 頭)と少(-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は少~平年並(概して少)(-)</p> <p>考察: 現在の発生は少ですが、気象要因を重視し、予想発生量はやや少と考えます。</p>

作物名	病虫害名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
ブドウ	べと病	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月22日発表)によると、気温は低くなく(-)、平年と同様に曇りや雨の日が多い(±)予想 (±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第3週)では、発病は未確認(平年発病葉率2.5%) (-)</p> <p>3) 一般圃場では、一部の防除不徹底圃場で発病を確認するが、少ない傾向 (-)</p> <p>考察: 現在の発生は少ですが、今後の増加を勘案して、予想発生量はやや少と考えます。</p>
果樹共通	カメムシ類	-	少	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(御浜町:6月1日~6月15日)では、誘殺数はチャバネアオカメムシ510頭(平年80頭)と多、ツヤアオカメムシ57頭(平年41頭)と平年並 (±)</p> <p>2) 予察灯(畑・松阪市:4月1日~6月20日)では、誘殺数はチャバネアオカメムシ39頭(平年385頭)と少、ツヤアオカメムシ36頭(平年71頭)と少 (-)</p> <p>3) フェロモントラップ(4月1日~6月16日)では、チャバネアオカメムシ誘殺数は、山地(津市白山町川口)で244頭(平年502頭)、中間地(津市白山町二本木)で267頭(平年644頭)、平坦地(松阪市嬉野川北町)で10頭(平年117頭)とやや少 (-)</p> <p>4) 巡回調査圃場(6月第3週)では、果樹園地への飛来は未確認 (-)</p> <p>5) 一般圃場では、やや少の傾向 (-)</p> <p>考察: 圃場への飛来は当面増加するとは考えにくく、予想発生量は少と考えます。</p>
チャ	炭疽病	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月22日発表)によると、気温は低くなく、平年と同様に曇りや雨の日が多い予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃(5月下旬)では、1番茶での発生は未確認 (±)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第3週)では、発病は未確認(平年発病葉率0.7%) (-)</p> <p>4) 一般圃場では2茶芽の生育は平年並~やや遅 (+)</p> <p>5) 一般圃場では、発生量は少~並(概して少) (-)</p> <p>考察: 大きな増減の要因はないので、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	カンザワハダニ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月22日発表)によると、気温は低くなく(+)、平年と同様に曇りや雨の日が多い(±)予想 (+)</p> <p>2) 県予察圃(6月上旬)では、寄生葉率は8.0%(平年6.1%)で平年並、1葉当寄生虫数は0.39頭(平年0.51頭)で平年並 (±)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第3週)では、平均寄生葉率は11.5%(平年6.6%)と多、平均寄生虫数は0.36頭(平年0.30頭)とやや多 (+)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は少~多(概して平年並) (±)</p> <p>考察: 大きな増減の要因はないので、予想発生量は平年並と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
チャ	チャノホソガ	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃フェロモントラップ(5月第1~6月第3半旬)では、第1世代成虫誘殺数は5,500頭(平年3,385頭)とやや多(+)</p> <p>2) 一般圃場では、発生量は平年並~多(概してやや多)(+)</p> <p>3) 一般圃場及び県予察圃における観察では、第1世代の終息は遅延(+)</p> <p>考察: 一般圃場の状況を重視して、第2世代の予想発生量はやや多と考えます。</p>
	チャノミドリヒメヨコバイ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃吸引粘着トラップ(4月第1~6月第2半旬)では、誘殺数は12頭(平年17.4頭)と平年並(±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第3週)では、平均寄生虫数は1.4頭(平年1.9頭)と平年並(±)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は平年並~やや多(概して平年並)(±)</p> <p>考察: 大きな増減の要因はないので、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	チャノキイロアザミウマ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月22日発表)によると、平年と同様に曇りや雨の日が多い予想(±)</p> <p>2) 県予察圃吸引粘着トラップ(4月第1~6月第2半旬)では、誘殺数は3,954頭(平年4,527頭)と平年並(±)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第3週)では、平均寄生虫数は12.1頭(平年18.5頭)とやや少(-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並~やや多(概して平年並)(±)</p> <p>考察: 大きな増減の要因はないので、今後の増加を勘案しても予想発生量は平年並と考えます。</p>
	クワシロカイガラムシ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月22日発表)によると、平年と同様に曇りや雨の日が多い予想(±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第3週)では、平均雄繭寄生株率は12.7%(平年16.0%)と平年並(±)</p> <p>3) 一般圃場での発生量は、平年並(±)</p> <p>考察: 一般圃場の発生状況を重視して、第2世代幼虫の予想発生量は平年並と考えます。</p>
	チャノコカクモンハマキ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃フェロモントラップ(4月第1~6月第2半旬)では、誘殺数は523頭(平年592頭)と平年並(±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第3週)では、1㎡当巻葉数は0(平年0.6)と少(-)</p> <p>3) 一般圃場での発生量は、平年並(±)</p> <p>考察: 現状は平年並と思われ、大きな増減の要因はないので、第2世代幼虫の予想発生量は平年並と考えます。</p>
イチゴ	うどんこ病	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月22日)によると、気温は低くなく(-)、平年と同様に曇りや雨の日が多い(±)予想(±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第3週)では、発病株率5.8%(H16~18平均19.5%)、10圃場中5圃場で発病を確認(-)</p> <p>3) 一般圃場での発生は、少~多(概してやや多)(+)</p> <p>考察: 一般圃場での状況を重視して、予想発生量はやや多と考えます。</p>

作物名	病虫害名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イチゴ	炭疽病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月22日)によると、気温は低くなく(+)、平年と同様に曇りや雨の日が多い(±)予想 (±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第3週)では、発病株率0%(平年0.02%) (±)</p> <p>3) 一般圃場での発生は、やや少~平年並(概して平年並) (±)</p> <p>考察： 現状は平年並と思われ、大きな増減の要因はないので、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	ハダニ類	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月22日)によると、気温は低くなく(+)、平年と同様に曇りや雨の日が多い(±)予想 (+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第3週)では、寄生株率14.0%(H16~18平均7.0%) (+)</p> <p>3) 一般圃場での発生は、やや少~多(概してやや多) (+)</p> <p>考察： 増加要因があることを勘案して、予想発生量はやや多と考えます。</p>
ネギ	ネギコガ	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃フェロモントラップ(5月5半旬~6月4半旬)では、誘殺数は1頭(最近5カ年平均103頭)と少(-)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第3週)では、被害葉率0%(平年0.05%)と平年並 (±)</p> <p>3) 一般圃場での発生は、平年並に少ない (±)</p> <p>考察： 急増する要因はなく、予想発生量はやや少と考えます。</p>

4. 予察項目の見方

1) 「作物別の状況」の見方

発生時期（平年比）： 平年の発生月日からの差を「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階評価で予測します。ただし、発生時期が毎年大きく変化する病害虫では、日数の基準が下記より大きくなります。発生時期を予察する意義の小さい病害虫では予察しません。

日数	-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生日	1	2	3	4	5	6
評価	早	やや早		平年並				やや遅		遅			

発生量（平年比）： 発生密度の平年値からの差を「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階評価で予測します。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

	平年値 ↓					
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少	やや少	平年並		やや多	多

発生量（程度）： 発生程度を「小、中、大、甚」の4段階評価で予測します。評価の基準値は病害虫毎に異なりますが、大雑把には、「見た目の多さ・少なさ」です。甚になるほど見た目は多くなり、小になるほど見た目は少くなります。「発生量（平年比）」と比べることによって、「平年並に発生程度が小さい」「発生程度は大きい平年並の発生量である」「平年より多いが、発生程度は小さい」「平年よ

りやや少ないが、依然として発生程度は中くらいである」等のように判断してください。

小	中	大	甚
---	---	---	---

要防除圃場率（平年比）： 防除の必要性の目安を「低、普通、高」の3段階評価で予測します。「普通」であれば、県下の大半の圃場では防除暦に沿った通常の防除をしていればいいと予想されます。「高」であれば、防除時期の見直しや追加防除などが必要な圃場の割合が相当増加すると予想されます。「低」であれば、防除回数を減らせるか防除しなくても済むような圃場の割合が相当増加すると予想されます。

低	普通	高
---	----	---

発生消長の一例： 発生予報は向こう1か月の予報ですが、その前後を合わせて40日ほどの病害虫の発生消長の一例をグラフで示します。大まかな目安として利用してください。

防除の注意事項： 向こう1か月の病害虫の特性と防除に関する説明です。

2) 「発生時期・発生量（平年日）の予察根拠」の見方

(±)：平年並の要因

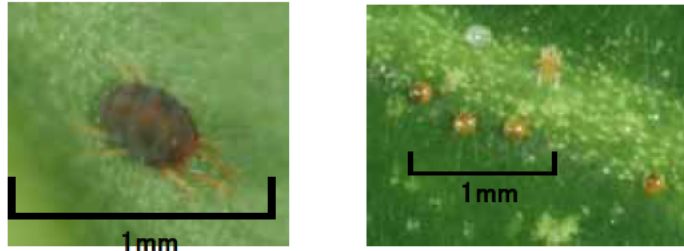
(+)：発生量増加または発生時期遅延の要因

(-)：発生量減少または発生時期早期化の要因

5. 今月のトピックス 「ミカンハダニについて」

1) 特徴と生活史

ミカンハダニはかんきつ類の重要害虫で、ナシにも発生することがあります。よく目立つ赤いダニで、0.5mm まで大きくなるため、虫眼鏡を使えば簡単に見つけることができます。



ミカンハダニ雌成虫 ミカンハダニ卵と孵化幼虫

三重県では、主に梅雨前と秋に急増します。年間十数世代を繰り返します。薬剤抵抗性が発達しやすい害虫です。冬も暖かければ活動を続け、増殖します。

主に葉裏につき、被害を受けると葉全体が白っぽくなります。

2) これからのミカンハダニ制御技術は・・・

近年、三重県ではミカンハダニの発生パターンが平年と異なる年が見られます。年間を通じて発生が非常に少なかったり、梅雨明けに大発生したりする年があります。いろいろな理由が考えられますが、防除体系防除薬剤の変遷、それに伴う土着天敵相の変化復活、冬期気象の変化などの影響が関係しているのかもしれませんが。

とりわけ、近年の土着天敵類の活動には目を見張ります。県南部のかんきつ園地でも、カブリダニ類やケシハネケクシ類が、ミカンハダニの発生消長に影響していることが確かめられています。

土着天敵類の保護活用技術は、かんきつ類におけるハダニ制御の重要な技術として確立されつつあります。

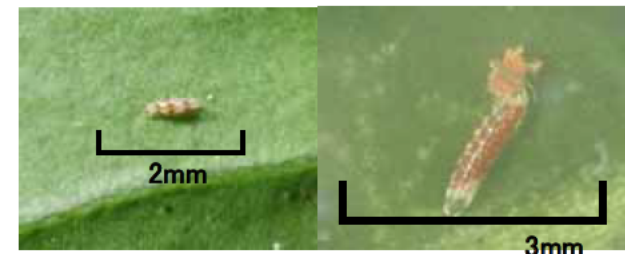
周辺の環境を適正に保全することで、土着天敵類の待避増殖場所になることがわかっています。また、園地内の土着天敵類保護のためには、マシン油乳剤を有効に利用するのがいいでしょう。かんきつ類では冬マシン、夏マシンは必ず散布します。樹体生育を健全にし、園地の基本管理を徹底することも薬剤を有効に利用するためには大切です。

3) 土着天敵類の写真

三重県のかんきつ園で見つかったミカンハダニの土着天敵です。



カブリダニ類 捕食中のケシハネケクシ類成虫 ケシハネケクシ類幼虫



ハダニアザミウマ ハダニバエ類幼虫

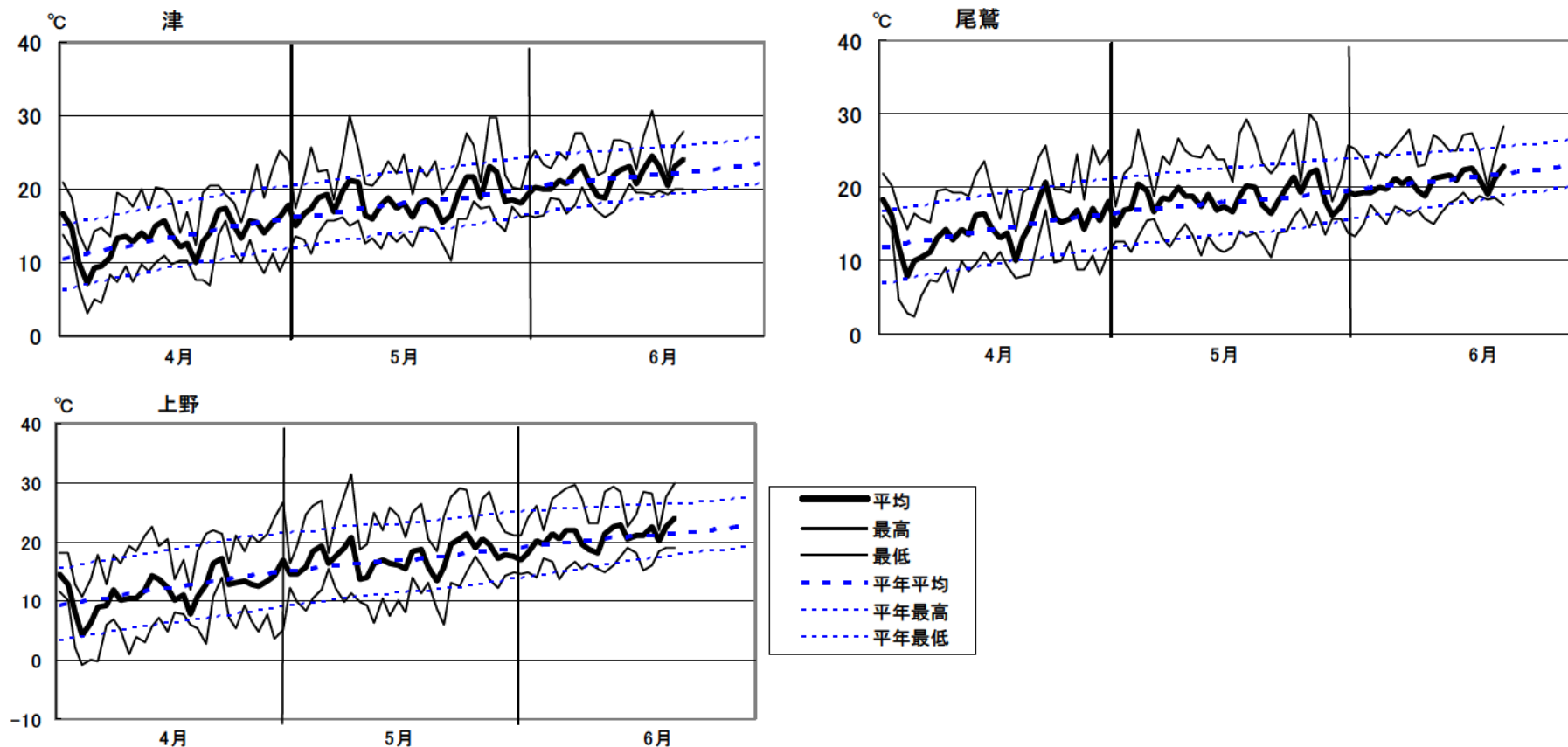
6. 気象のデータ

東海地方 1 か月予報 (平成 19 年 6 月 22 日 名古屋地方気象台発表)

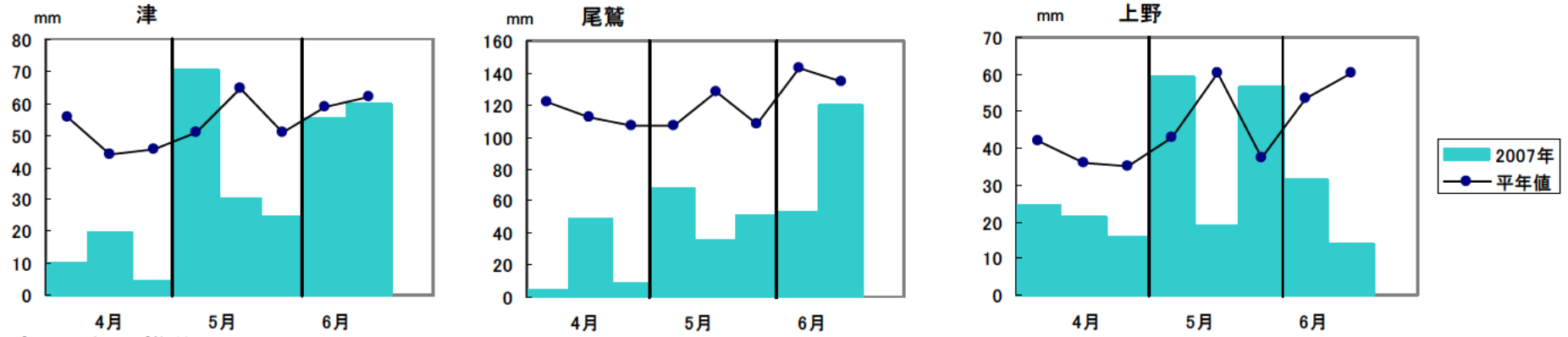
東海地方の向こう 1 か月は、低気圧や梅雨前線の影響で、平年と同様に曇りや雨の日が多いですが、高気圧に覆われて晴れる日もあるでしょう。

1 週目 (6 月 23 日～29 日)	低気圧や梅雨前線の影響で、曇りや雨の日が多いでしょう。	晴れ日数の平年値 約 2 日
2 週目 (6 月 30 日～7 月 6 日)	低気圧や梅雨前線の影響で、曇りや雨の日が多いですが、高気圧に覆われて晴れる日もあるでしょう。	同 約 3 日
3～4 週目 (7 月 7 日～20 日)	低気圧や梅雨前線の影響で、曇りや雨の日が多いですが、高気圧に覆われて晴れる日もあるでしょう。	同 約 6 日

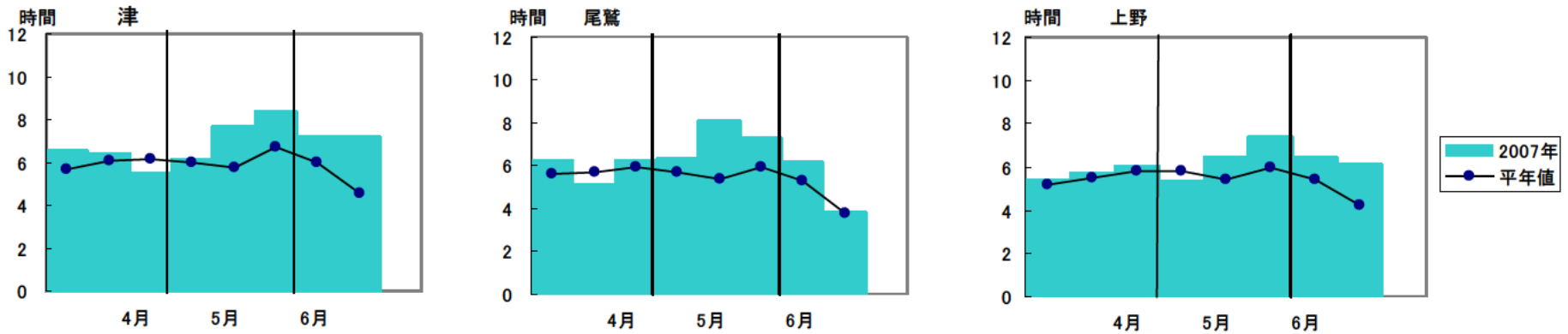
気温の日別推移 (東京管区気象台発表データ<http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php>から作成)



降水量の旬別推移 (東京管区気象台発表データ<http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php>から作成)



日照時間の旬別推移 (東京管区気象台発表データ<http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php>から作成)



7. おしらせ（前回と異なる項目にはNEWの印があります）

1) 利用方法

この病害虫発生予報は、定期的（4～8、10、3月各月の下旬）に発表されます。この予報の他、不定期に警報、注意報、特殊報、技術情報も発表されます。

これらの資料は全部または一部をコピーして再配布しても構いませんが、必ず「三重県病害虫防除所」の文字が入るようにしてください。

病害虫防除所ホームページには、これらの情報のほか、各種のグラフや写真も載っています。下記のアドレスからお入りください。

<http://www.mate.pref.mie.jp/bojyosyo/>

2) メール通知サービス

予報、警報、注意報、特殊報、技術情報が発表されたときに、ホームページに掲載されたという「掲載通知」を電子メールでお知らせするサービスを行っています。この通知を希望される方は、病害虫防除所ホームページの要領にしたがってお申し込みください。下記のアドレスからお入りください。

<http://www.mate.pref.mie.jp/bojyosyo/byotyumail.htm>

3) 農薬登録状況の最新情報

農薬の販売や使用に当たっては、農薬登録上の制限があります。農薬の使用時はラベルをよく読んでください。最新の農薬登録状況を確認するには、次のインターネットサイトで調べるのが便利です（下記のアドレスに変更されています）。

独立行政法人農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報」

<http://www.acis.famic.go.jp/searchF/vtllm000.html>

4) NEW 三重県病害虫防除の手引き

「三重県病害虫防除の手引き」の冊子版（平成19年3月12日発行）を6月末までに病害虫防除所ホームページに掲載します。

5) 本冊子の利用の手引き書

本冊子の利用の便宜を図るため「平成19年度病害虫発生予報利用の手引き」を作成しました。下記のアドレスからお入りください。

http://www.mate.pref.mie.jp/bojyosyo/yoho/h19yohotebiki_.pdf